

に限らんやは。

川水まして、野に若菜萌ゆる頃、春雨しめやかに、文窓を訪づれて、遠方濛々と霞む日は、人の心も和ぎゆくのごげさ、暖國には、梅の香も、たいよふべし。

又は、炎熱に苦しむ夏の夕、一陣の雨を得て人も、草も、蘇生すること、うれしけれ。黒雲のちぎれより、さし出つる月に、再び、雨戸くる涼しさ、青き葉のゆらぎて、露のこぼるゝ美しさなど、雨の後ならでは、得られぬ、景なりかし。

秋の雨こそ、あはれに、なつかしきものなれうらゝかなる空の、忽にしぐれて、里人の、稻負ひて走るも面白く、三つ四つ残れる蒔柿の、雨にかゝやくも美しけれぞ、殊に、暮秋、寒雨潑々たる夕こそ、げに秋のあわれ、のこさぬ、心地のすれ。旅なる學び子が、ほだゝく圍爐裏思ひ出で、父母同胞の恩愛、切に、覺ゆるもかゝる夜なるべし。吾嘗て、山深き紅葉を、雨の中に、とひてより、一入、雨の秋の日の、美

しさと、なつかしさを知りぬ。

ゆかしきかな、雨の日。その雲々と降るもよく、平然と來るもよし。風あるもよく、風なきもうれし。霏々たる雨は、愁人の腸をたち、鞆々たる雨は、人をしてたゞしめん。見よや、天地の、こまやかなる情、幽邃なる趣の、雨の日に多きを。

なつかしきかな、雨の日。印象深き雨の日は又こん雨の日の、思出なり。天地沈靜なる雨の日、我が心なき、わが懷遠し。

あゝ雨の日、吾は、其の蕭々として、しめやかなるなつかしさを好む。

花の艶を、美とし、月の清を、高とする吾は雨の日を靜として、忘るゝ事、能はざるなり。



短歌

◎街の道

柴舟

ゆるやかに歩みたまひし森川の街の道さへかはりはてにし  
そのかみは聞きつらかりしたん咳の響またせは嬉しからむを  
目つふれはまなふたすこしあかるきが中にさやかに君かます見ゆ  
君なくてたゞ足なえしうさき馬行きわつらへり人の世の道  
たふとしや君かみことを空耳に聞きてありしにあらぬ身なれど  
年ふれと君かみあどを追ひもえず憐みたまへ愚なるみを  
つたなきは苦しかりけりわん弟子の一人といへる名を汚しつる  
はるはるとおくりまつりし御柩の中に心は入りはてしかな  
いかでわれ君か御ことにたかひけむありて思はぬ事をのみ見る  
かくせよと教へたまひきかくすなど叱りたまひきなつかしきかな  
(なき師の君をしのひて)